

8年目の福島を訪ねて

2019年 11月 5日～ 7日

10万年プロジェクト 切明澄枝



原発ゼロ・市民エネルギー委員会の保養を担当している 10万年プロジェクトのメンバー 4 名と事務局 2 名は、9 回目の夏の保養活動を終え、参加者の声を聞きこれからの保養の展望をひらくため、福島を訪ねてきました。



2014年に訪れた時とは、景色が変化してきていることを感じました。一面の痛々しい荒れ野だったところは、土が盛られて、住民がいつでも帰還できるようにと整備されていて、フレコンバック仮置き場が唐突に現れなければ、のどかな日本の風景が続きます。私たちは、懐かしさもあいまって、つつい油断してしまいましたが、国道 6号線を南下している時の放射線測定器からの突然の警告音が鳴るたびに、福島を訪問していることを思い知らされました。

3 台の測定器は、札幌とは一桁違う測定値でその中で「高い低い」と一喜一憂しているうちにその緊張に慣れてしまって、少し低ければ安心してしまうことも間々有りました。このことが、此処で暮らすということなのだと思います。



日中は、東京電力廃炉資料館(富岡町)、環境創造センター(三春町)、環境再生プラザ(福島市)等精力的に視察しましたが、どれも原発を肯定している立場からの言い訳の施設に過ぎず、私たちの立ち位置と大きくかけ離れていて、ここを訪れる見学者に間違った知識を植えつける危険を感じました。

いよいよ組合員交流会の日。

予想を超えた参加者(総勢 28名)に、主催者も私たちも驚きながらも再会を喜び合いました。

第1回目の保養参加者が5名も来てくださり、取るものもとりにあえず計画した不備だらけの受け入れ態勢にも関わらず、皆さんが当時の心境を涙ながらに語ってくださって、「原発事故が無かったら、私たちはここに集うことが無かった。そして、北海道のみんなに出会え、このように繋がることは無かった」という発言には、このように思わなければ、福島では暮らせない悔しさが伝わって、何ともし難い力不足を感じ、国や東電への怒りがますます堆積してきました。

原発から 20キロと、30キロの線引きなど不可能です。

その事で多くの二次、三次の不幸が起きています。

「もう福島は安全です」宣言など国や東電は明らかうそをついているのです。

その証拠は、放射線被害の無い災害地域では、徐々に復興してきています。

直接、顔を合わせて集い語り合えた貴重な時間。「福島」というくくりを越えて、心情から繋がり深まりあえました。私たちが北海道という地で、このように活動していることは、「福島の方たちの心のふるさと」の役割も果たしている事にも気付かされました。



この活動は、10万年続けなければならない、という心意気を参加者全員抱きながら、福島をあとにしました。